

## 「平和の俳句」

2015年01月12日

「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」という俳句をさいたま市大宮区の三橋公民館が発行する公民館たよりに「世論が二つに割れる問題で一方だけは載せられない」と掲載を断った。政府の改憲の意向におもねるような公民館の対応に様々な批判が出ている。「9条の会」の集会開催などでも、行政は協賛を断るケースが多々見られる。憲法99条の「憲法尊重擁護義務」は天皇はじめ公務員に負わされていることを知らないのであろうか。俳句という文学の世界まで、自己規制するような状況にあることに深い憂慮を覚える。

俳人の金子兜太氏は、この問題について下記のようにコメントしている。『『九条守れ』の女性デモという一つの日常を詠んだもので、特別な意味を込めて作ったわけではないでしょう。そもそも、この句のように社会で生きている人間を題材として詠むのは、現代俳句ではごくごく当たり前のこと。この状態に向かって政治的な尺度を持ち込むのは、野暮で文化的に貧しい話』。金子氏は戦時に、トラック島で激戦と飢餓を経験し、敗戦を迎えて帰国する船の上で「水脈（みお）の果炎天の墓を置いて去る」と詠んでいる。平和への思いは人一倍篤いものがある。

『東京新聞』は「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」の不掲載に怒ってか、戦後70年を記念してか「平和の俳句」を全国から募集し、毎朝刊一面に一句ずつ掲載している。元旦から始まった。選者は、俳句で平和を表現していこうと意気投合した金子兜太氏といとうせいこう氏の二人である。俳句に季語は必須だが、季語なしでもいいと言う。新聞を受け取ると、楽しみに真っ先に目を通す。

元旦は「平和とは一杯の飯初日の出 浅井将行（18）愛知県西尾市」であった。浅井氏は「30秒でひらめいた。普通すぎるかな、と思っていたのでびっくりした」と年の始めのお年玉を喜んだとのことである。金子氏は「浅井君は毎日のご飯に感謝し、その毎日の平和を守る覚悟だ」、いとう氏は「まずささやかな満足が個人にある。それなしの平和などない」と選評している。

現在の日本でも、持ち金を計算しながら一杯の飯を食べている人がいる。豊かな人も、貧しい人も否応なしに経済戦争に巻き込まれているが、銃弾に怯える生活ではない。安穏な毎日である。これを、何とか守っていきたい。また、金芝河の「飯が天です／飯が口に入るとき／天を体に迎えます」という詩を思い出す。飯を分かち合う平和を願う。

「初日の出」は見たことがないが、20年前、モーセが十戒を受けたというシナイ山頂で神々しい「日の出」を息を飲んで見た経験がある。晴れた朝には、朝日を受けて赤く染まる富士山を西に見て、楽しんでいる。

3日は「一票は銃弾より重し八っ手花 近吉三男（98）石川県白山市」であった。いとう氏は「ペンには誰にでも使えるものではない。だが一票は大人に等しくある」、金子氏は「言い切り見事。冬の花八ツ手とよく合う。平和のために一票を」と評している。98歳の近吉氏の近況が、後日、新聞で報道された。体重が規定に達せず、軍隊に入れなかった。砲弾と自爆艇の生産に従事した。出征する後輩を十人近く見送ったが、誰一人帰って来なかった。衆議院総選挙があった昨年末、戦争の道に進むのか、留まるのかは自分たちの一票で決まると思いながら、太極拳教室に通う道で、八手の花が目に入ったと言う。八手は義母が好きで、露地に植えていた。八手は成長が速くよく茂る。時々剪定を頼まれ、義母を懐かしく思い出した。「平和の俳句」が読まれ、平和につながることを期待したい。